

第2部会

擬ディオニシオス・アレオパギテースの
キリスト像

高橋 渉

本発表では、擬ディオニシオス・アレオパギテース（六世紀頃）の描き出したキリスト像を、彼独自のヒエラルキア論との関係から考察する。

キリスト教の思想は、いわば、イエス・キリストという、神にして人間なるものについての理解を巡って展開してきた。そのようなキリストの内的構造を問うキリスト論はしかし、イエス・キリストという個人の内的構造についての問いであるに留まらず、万物を在らしめる根拠たる神と人間との関係をも、その射程に包含するものであると言える。その意味で、キリストについての問いは、優れてキリスト教的な論件であると同時に、極めて普遍的な問いである。本発表で問題となる、擬ディオニシオス・アレオパギテースは、古代末期において、ギリシア教父の伝統を受け継ぎ、当時のキリスト教にとって「異教」の哲学であった、新プラトン主義の術語とその思想的枠組みを大胆に用いて、両者に独自の綜合を与えた人物として知られる。彼は、まさにキリスト論を巡る論争が激化した六世紀のキリスト教世界において、当時の新プラトン主義の術語でもってキリストを表現した。このことは、キリスト教思想に固有の言語を、他の思想領域の言語において語ることで、そこに新たな意味を披き示そうとする試みとして理解しうる。

しかしそこには、新プラトン主義とキリスト教思想を綜合しようとした、ディオニシオスに固有の問題があった。というのも、新プラトン主義の思考においては、「神」と「人間」は、概念的に明確に区別されており、キリスト教の教理が規定したような、「全く神」であると同時に「全く人間」であるようなものは、背理であり、矛盾そのものだからである。では、ディオニシオスはキリストをどのように描き出したのだろうか。

ディオニシオスは自らの著作の中で、「ヒエラルキア」という、新プラトン主義の思想的枠組みを用いた、彼に固有の概念との関係において、自らのキリスト像を表現する。彼に拠れば、「ヒエラルキア」とは、第一義的には「神聖な配列」を意味する。すなわち、そこにおいて、配列を構成する者たち（天使と人間）によって儀礼が執行され、かつ神の働き（テウールギア）の現成する、神聖（ヒエロス）の支配（アルケー）が行われる、新プラトン主義的な世界観と重なるような、階層構造をもった「場」である。

ディオニシオスは、キリストを「ヒエラルキア」の頂点におき、それを支配する者として描く。ここで、ディオニシオスの意図は、キリストの神と人間を媒介する在り方、いわば仲保者としてのキリストの在り方を保ちつつ、なお神の媒介者としての天使の位置を確保して、キリストと天使を両立させることにあったと思われる。それはつまり、新プラトン主義に代表される、古代のギリシア哲学とキリスト教との融和・調和を図ることである。だが、それと同時に、ディオニシオスは神であるキリストの人間による理解を絶した在り方を、損ねまいと

もしている。それは恐らく、当時の、キリストの内的な構造を解剖学的に理解しようとする、キリスト論全盛の時代背景と無関係ではないだろう。つまり、ディオニシオスは、認識が対象を所有することである限りにおいて、キリストを直接の認識の対象としてしまうことで、キリストを我が物として把握することを避け、それとは別な態度を取ろうとしている。彼は、キリストをヒエラルキアとの関係において論ずることで、キリストを神と天使と人間とを連結する、なんらかの「場」として描き出している。「場」である限りにおいて、キリストは対象化されることはない。しかし、人間も天使も、その「場」の中で行為するがゆえに、決してキリストと無関係に在るのではない。むしろ、彼のキリストは決定的な仕方、神と天使と人間とを媒介している。

転回と回心

——バルトとアウグスティヌスの場合——

松田健三郎

バルトはアウグスティヌス（以下A）を「造られざる霊を造られた霊の連続の中に求めていた」とみる。「あなたを知るようになって、…いつも、あなたを記憶の中に見出すのです」を言質とする。またオスティアの直視を評している、「神の認識は恩寵によって呼び起され、導かれるとは言え、やはり、自己

の内なる努力、絶えず上昇して行く超越化の長い階段の最後の一步である」と。「造られざる霊を、造られた霊の連続の中に求めていた」とされる所以である。対して、バルトは神と人間との間の非連続性を主張する。問題は、もとより、「主なる神と人間との間の非連続性」そして「神と被造物との間の連続性」にある。「かつて自分の五体を汚れと不法の奴隷として、不法の中に生きていたように、今これを義の奴隷として献げて、聖なる生活を送りなさい」を註解している。われわれの「肢体」、つまりわれわれの死ぬべき体に見られるこの並行性を可視化するという意味でそうするのでないなら、恵みは恵みでないだろう。この連続性を註解している。この可能性は不可能なもの可能性である。バルトは、Aとの差異をこの不可能の可能性にみる。そこにかれの「死から生への転回」がある。この観点から、オスティアの直視は批判された。「私たちは段階的にすべてのものを通り過ぎ、ついに精神に到達し、…さて私たちは、知恵について語り、喘ぎ求めながら、全心の力をこの一挙に込めて、ほんの一瞬それに触れました。」ここに「連続性」をみることも可能であろう。『三位一体論』は直視失敗を次々と描いてみせる絵巻物である。Aは、一たること望んで生きた。それは、オスティアの直視の記述、「ほんの一瞬それに触れました」が、また、「わたしたちが思いを伸ばし、万物をこえてとどまりたもう永遠の知恵にあわただしい思惟によってふれたように」とも表現されていることから了解される。「思惟」は、その語源として「集める」をもつ。したがって、直視とは、ばらばらになっっているもの、分裂しているものを一